

「太陽は神様か」 — 21世紀の庶民感覚

熊本保健科学大学 副学長 岡部由紀子

「太陽は神様（である、であった）」と言われたり、読んだりするとき、現代の私たちはどんなふうにいるでしょうか。たいていは、相手が何を言いたいのか、状況や前後の文脈から察して、「そうですね」と相づちを打ったり、特定の文化を報告する興味深い記事だと思ったりするでしょうが、場合によっては、特殊な信念を主張する変わった人だと後ずさりするかもしれません。いずれにしても、「太陽」と「神様」を（ゴ動詞で）結びつけることは、現代の私たちに一呼吸おいた反応を求めるように思います。どうしてなのでしょう。

「天体」と「神様」は、いずれも近代を境目に、大きく異なった受け止め方をするようになったものの代表でしょう。ちよつと哲学を嚙かじった大学生くずれなら、そもそも近代以前と以後とで同じものについて論じていることになるのか、と問題にするかもしれません。そこまで堅いことを言わなくても、現代の私たちは、「太陽」にせよ「神様」にせよ、とてもよく知っているおなじみの単語のつもりで口にしながら、他方で、いくらか覚束おぼつかない気分になるのではないのでしょうか。その覚束なさを手がかりに、私たちの言葉の使い方と世界認識のありかたについて、「お題」をめぐる小さな報告を試みたいと思います。

まずは「太陽は神様である」の引き起こす困惑、覚束ない気分の原因を探ってみましょう。

「太陽は恒星である」や「太陽は惑星である」は真偽の間える命題なのに、「太陽は神様である」はそういう種類の命題ではない。そう私たちは一瞬にして判断しているのでしょうか。そうだとも言えます。「恒星である」（と述語づける）とはどういうことか、きつちりどこかで規定されていると思えば、困惑することはありません。自分がその規定を知らない場合は「わかりません」で済む話ですし、何か思い違いしていたとしても、それはそれだけのことでしょう。「神様である」の方は、そう簡単にはいかないような気がします。

他方で、私たちは、思いがけないもの同士が結びつけられたときも、新しい表現として受け入れる余地をもっているということがあります。成功した詩人や預言者は、そういう力をもつフレーズを見つけて出して、私たちの世界認識を広げたり深めたりする人たちかもしれません。新しさとともに説得力のある表現として直ちに、あるいはゆっくりと共感がひろがり、人々に浸透していく。そういう表現を生む人たちを構成員の内部にもっているということは、人類に固有の言語のあり方として興味深いことです。しかし、誰かがやみくもに言葉を結びつけて、例えば「太陽は蟹かにである」と言ったとしても、そういうわけにはいきません。「えっ、何のこと？」と聞き返すのが普通でしょう。ですが、「神様である」の方は、そうではないと思います。その違いは何なのでしょうか。

一つの答え方は、「太陽」と「神様」との結びつきは、昔からよく知られた組み合わせだから、ということかもしれません。そういう神話や伝承があったはずだし、大昔の誰かがそう言い出し

てそれなりに受け入れられていた、と現代の私たちは想像できる。けれど蟹についてはそうではない。そういうことだろう、というわけです。

この説明は、「神様である」は「蟹である」よりはスムーズだけれど、「恒星である」ほどには素早く反応できない表現だということを幾らか納得させてくれますが、「神様である」がもたらす困惑は説明してくれないように思います。

文脈から読み取る

私たちは「太陽」のことを、「神様」よりはよく知っていると思つていてでしょう。「太陽」からみてみましょう。

私たちが言葉に接するとき、単語だけがぼつんと置かれている、ということは滅多にありません。誰かが一声、単語だけ発した（「太陽！」）などというときでも、その特定の状況の中で、それが理解されることを発言者は期待しているはず（「雲の間から太陽が見え始めたよ！」）。私たちが文を理解するとき、単語の意味を私たちはそれが置かれている文の中で読み取っています（単純に済ませたいので、とりあえず、ごく短い文を想定してください）。他方、単語の意味はその文の意味が成立することに寄与するはずで、文が意味を持ってないように見えるとすれば、そもそもその文自体が無意味なものであるか、その文を構成している単語の使われ方（たとえば比喻として）を読み手が知らないために意味をとれないのか、であると考えられます。（注1）

例えば、同じ日の朝刊で、ちよつと不気味な太陽の黒点の変化について、物理学者による一般

向けの解説記事を読んだ直後に、別のページで「○○さんは、この施設の皆さんの太陽です」と読んでも、私たちは当惑することはありません。私たちは、それぞれの文脈で「太陽」という単語の意味するところを適切にとらえているからです。

しかし、「(太陽は) 神様である」という表現(命題)について考えてみると、どのような文脈であれば困惑しないだろうかと想像してみると、やはり、少し話は少し違うようです。もう少し丁寧に見ていきましょう。

さらに別のページで、登山者が御来光を拝んでいる写真記事を見ても、私たちはそんなに驚かないでしょう。黒点の記事を書いた物理学者がその登山者の中にいることだってありえます。現代の山小屋では少なからぬ登山者が暗いうちに近くのピークまで出かけて行きますが、太陽が顔をみせると自然に拍手が起こったりします。手を合わせて拝んでいる人もいます。そういう場面に遭遇するとき、その人たちが特別な信仰を持つ人たちだと思ふことはまずありません。

これら三つの記事は、どれも私たちに、それほど違和感を覚えさせないと思います。御来光の話は写真記事の例からでしたが、いわば振る舞いの文脈とでもいうようなものを考えてみれば、手を合わせている人たちの姿を奇異に感じる人はあまりいないのではないでしょうか。私たちは「太陽」について、どの表現もすんなり受け入れることができます。三つの例は、実はずいぶん違います。ここでは、手を合わされている対象は何なのか、気にとめておきたいと思います。

天体

20世紀後半から21世紀にかけて歳を重ねた私たちは、すでに、現代の物理学が告げる、もの凄い規模の宇宙論のなかに位置する太陽系の話を、リアリティーをもって受け入れていると思いません。同じようにまた、太陽を中心にして回っているというほかの惑星や、45億年くらい前にできた（しかも「神様」なしに）らしい地球の話を、ごくリアルなものとして受け入れていると思います。義務教育によるそれなりの下地があれば、その程度のことについては、たとえ自分が説明できるようなことではなくとも、専門的に研究している人たちが言っていることを大筋では疑わない、そういうくらいにはなっているからです。それぞれの時代において「現代」の一員であるとは、そういうことでしょう。

もうずいぶん前のことですが、9月の北アルプスで、山頂の山小屋を揺するほどの強風の後、夜中に起き出して文字通り満天の星空の下に立ちすくんだことがあります。恐ろしいほどに強く圧倒的な威力をもって輝く空が鳴り響くようで、その迫力に魅^みいられながら、齒の根が合わないような寒さと昼間の疲れで何分も見続けることができないのでした。見慣れた星座の見分けもつかないほど無数の星から浮かび上がる「はくちょう座」は襲いかかるように翼を広げて、悠然。そしてまた、これほどの星ぼしを恒星やほかの銀河系として意識している脳の片隅が、さらに震えを助長します。その孤独感、心細さは太陽系に「仲間」意識を感じさせるほどでした。現代の私たちは、「太陽」が相対的には大きくない存在であると語る「知識」を脳の片隅から追い出す

ことはできなくなっていると実感した次第です。

それでも私たちは、初日の出や御来光をなにかしら神々しいものとすることに矛盾や不合理を言い募ることもなく、手を合わせている人のふるまいを「迷信」だとか「迷妄」だと蔑むことはありません。宗教的な意味を仮託された造形（仏像や十字架のようなある種のシンボル）に対するのは異なり、誰もが一目でそれとわかる対象に向けられるごく直接的な次元での「祈り」（とまで言っていないのかわかりませんが）や「表敬」は、むしろ、どこかで、ゆるやかに説得力が働く余地をもっているのかもしれませんが。それは、少し大げさに言えば、人間が自らの文化的な環境を整合的なものとして再構成していく、そういう過程で必要になる、ある種の全体的な適応力のひとつの反映かもしれないと私は考えています。

神話・伝承

「神様」は、たいていどこの文化でも（ふつうは）見えないことになっています。それに比べると「太陽」は、文字通り上空にあつて、誰でも見たり温度を感じたりできるような、広くあまねく知られている存在です。天候が気になる農耕が始まったのは1万年くらい前と言われますが、それよりもずっと前から、人類はその大いなる力を感じ受していたはずでしょう。夜と昼とを分かつ、他の何にも比べられない強い光源として、また、日射しから肌に直接感じられる暖かさ（熊本でなら暑さ）の遠い遠い熱源として。そして、その威力と超絶的に届かない遙かさの認識は、私たちの誰もが今でも共有しているのではないのでしょうか。現代の物理学が教えてくれる燃えさかる

エネルギーの塊は、地上にあつて仰ぎ見る、おおいなる光と熱の源として、大昔から受け止められてきたでしょう。信仰心のさきがけとなる「恐れ」や「待ち望む」というような感情は、「太陽」という遙かな存在を対象にすることで宗教的な最初の歩みを始めたのではないかと考えられます。

多くの神話や伝承が、太陽を「神的なもの」として伝えてきました。世界中のいろいろな神話の起源が大もとではつながっているのかどうか、よくわからないのですが、太陽は擬人化されて男性神になったり、女性神になったりしています。たくさんの神々が出てくる神話の世界では、必ずしも飛び抜けて一番という位置にあるわけではありませんが、太陽はどの神話においても、言うまでもなく、特別なグレードに置かれています。何万年もかけて、人類の言語が成立してきた過程で、自然現象はそれぞれの及ぼす力や影響力を見積もられながら「神々」として識別されてきたのでしょう。そしてまた、そのような力をあらわす神々への「恐れ・畏れ」は、もちろんずいぶん後代になってからですが、人間たちのさまざまな自己認識（有限や無常）を反映する、戒めや、憐れみをとりにこんで、今日の私たちが「神話・伝承」という文学ジャンルとして享受しているようなかたちになったと考えられます。

人類がいつから「こころ」をもつと言えるようになったのかは、いろいろな研究分野が温め続けていく興味深い問いですが、少なくとも「神話・伝承」の成立するころには、自分たちをいつかは死ぬものとして認識していたはずですし、亡びることの意味も、人間であることの限界も、幾多の英雄伝説を描きながらかみしめていったでしょう。その上でまた、人を超える存在に対する、

人間的な営みのもつ意味を、怒りやねたみが引き起こす多くの事件、悲しみ、喜び、愛惜、などに彩られた登場人物（神々）を配した、「作品」として共有していったのでしよう。各地の神話文学は、抗しきれない力を発揮する神々と人間との交流を描きながら、人間と神格化される力との関係を測っているように思えます。

太陽について、熱と光と、どちらが強く意識されているのでしょうか。ギリシャ神話の太陽神ヘーリオスは、燃える火の車を御して天空を駆けていきます。この父の息子であることを示したいあまり、せがんで車を借りた息子パエトーンは、これを制御しきれないで地上に火事を起こし、最後は大神ゼウスによって墜落させられてしまいます。鳥の羽を蜜蠟みつろうではりつけ、巧緻な空飛ぶ翼を作成したイカロス父子の話では、戒めを忘れたイカロスが太陽に近づきすぎて蜜蠟が溶け、墜落してしまいます。イカロスやパエトーンを墜落させたのは太陽神ヘーリオスが統御する火の車の熱でしたが、他方、わがアマテラスが弟スサノオの乱暴狼藉らんぼうぞうぎに失望して岩戸にこもってしまったとき、皆が困ったのは光なき世界の混乱でした。光は、見ることに、見分けることを成立させる絶対的条件であり、何よりも「知」に結びつく豊富なメタファーに満ちています。最強の光源は、人々に「見ることに」を可能にすると同時に、直視すると視力を損なう、罰のあたる、畏れ多い存在でもありました。

もちろん、西洋では「光」が強調されていなかったなどと言うつもりはありません。図として挙げた「Dominus illuminatio mea」というのはオクスフォード大学の紋章として、この世界一

の大学出版局による書籍の多くに見ることができず（図1）。冊子体を開いた図柄2ページにわたってラテン語の活字体文字が並んでいるだけです。3単語からなる文だとは気づかない人もいるでしょうが、デザインとしては見たことのある人が多いでしょう。

出版局の紋章としては16世紀から使われているようです。この紋章の由来には、西洋中世の認識論として唱えられたことになっている。「照明説」というやっかいな議論もからむのですが、ともかく、『詩篇27』を出典とする「主は我が光」という一節が出典として知られています。「神様」と「光」がDの動詞で（ラテン語はこういう場合には省くので文字としては出てきません）つながれている、身近な例でしょう。（注2）

私たち日本人は（私も含めて）、ユダヤ・キリスト教の言説が西洋文化に深く浸透していることを自覚することはあまりないように思われます。現代の日本人は明治時代の日本人に比べて、はるかに「西洋化」していて、その分（宗教の核となるような精神的な骨組みについては別として）、キリスト教文化圏のさまざまな表現にも親しんできていえるでしょう。私の世代などは、テレビの珍しかった子ども時代に読みふけた少年少女文学全集というようなメディアを通じて、知らず知らずに、キリスト教文化にも幾らか親しんできたと思います。行ったことのないのに、「日曜学校」なるところで『詩篇』（の一節が印刷された）カード集めに熱中している主人公たちを懐かしい遊び仲間のように思い出すこともあります。そんなふうにもまた、実は、地球



図1

上の至る所で、その地域に特有の神話としてであれ、近代化と並行したキリスト教系の「西洋」文化に触れながらであれ、子どもたちは、「光」と「神様」が結びついているたくさんのメタファーに囲まれて育ってきたように思います。それは、もちろん、圧倒的な太陽の存在感があまねく共有されていることの証だと言っていいでしょう。私たちには太陽を相対化して考えることさえ、ほんとうのところは、難しいのではないでしょうか。

現代人の多くは、「わたしたちの地球」という言い方を、普通に使うでしょう。町とか国とかではなく、いわば天体のスケールで「地球」を対象化するようになっていくことになりました。そのかけがえのなさについて、とりわけ現代人は痛切に認識を深めているただ中であって、愛情とも懸念ともいうような複雑な気持ちを抱きつつあるところでしょう。「わたしたち」は「地球」とそこにあるすべてを気遣う責務があるという思想もかなり広く受け入れられていて、凡人の私などでも、利便性や迅速性に惹かれてエコに反する選択をしたと自覚すると、いくらか自責の念を感じたりもするのです。そこには「限りあるもの」としての「地球」が思い浮かべられていて、もつともつとケアしていかなければ死んでしまう、少なくとも、生命をはぐくむというような力を枯渇させてしまう、と心配されているのです。

この心配については、ここではおいておきます。しかし、「大いなる大地」や「大海原」おおみづほらは、もはや、私たちにとって「かぎりない」ゆたかさや広がりを中心しきって託すことのできる表象としては機能しなくなっているでしょう。その代わりに、いとおしく、青く美しい惑星として、私たちの

未来も含めて奇跡のように宇宙空間に浮かんでいる球体：人工衛星がもたらしたのは、表象の「転回」とも呼ぶべき、静かだけれど否応なしに私たちの意識の底まで浸透していく力を持った映像でした。人間の営みを根こそぎにするような恐るべき天変地異もまた、この天体ごと、私たちのものであることを思い知ることもあります。

月はどうでしょう。

「まあ、月は、いちおう、地球のものだ」と、誰もが思っているのではないのでしょうか。なんとと言っても、世界中の小学生が天体の運動や太陽系の諸惑星について学習する時代です。誰もが太陽と地球と月の間にはそれぞれ主従のような格差があると承知しており、月面探査機からの映像にも見慣れてしまっています。ふと見上げた空にかかる大きなおぼろ月や冴えわたる名月に息をのむ瞬間のぜいたくを堪能しつつ、石ころだらけの写真が脳裏に浮かぶのを忘れきれないまま、「見える」限りのものとして愛でる。両方を同時に感じながら、少し倒錯的な、少し損なわれた気分です、どこかで惜しむのは、私のような世代までなのかもしれません。ともあれ、「月」は地球に属し、だから、まあ私たちのものだ、というわけです。

それに対して、「太陽」はなかなか微妙な心理的距離感を抱かせます。木星や金星に向かって「太陽は地球のものだ」とは言い張れないだろうな、と小学生も思うでしょう。惑星同士は同列だ、と思わずにはいられないからです。ホルストという作曲家が太陽系にちなんだ『惑星』という組曲を書いています。たいてい誰でも「木星」だけは聴いたことがあると思います。一番大

きな惑星である木星に、ローマ神話の最高神ジュピターが当てられていることは、その分、太陽を別次元でとらえる気持ちの表れかもしれません。この太陽系の範囲で、太陽が別格であることを、地球の住人たる私たちは実感しているのでしょうか。

宇宙にはたくさん銀河系があつて、わが太陽系はそのまた小さな一つに過ぎない、と相対化することができる時代になりながら、それでも実は私たちは、あの太陽を「超別格」とでもいうような存在として強く、強く実感しているのではないのでしょうか。そして、その実感は、なにかしらどこかで、私たちの生命体としての、特殊な生存の自意識のようなものに由来しているように思われます。「のよなもの」というのは、全く不正確な言い方ですし、「意識」とすら、とても言えません。それでも、細胞や、塩基や、原始のスープ仮説といった知識とはかわりなく、私たちの中に「太陽」はいのちの根源として焼き付けられているかのように思われます。それなしには、あらゆる生命体が、いのちそのものが存在し得ない。そういう、ウルトラ・スーパー・超特別な存在として、私たちのなかの生命が（意識とは言えないレベルで）太陽をとらえている。そんな気がします。それは生の根源であり、それゆえまた、死をももたらす、絶対的な「力」です。ジュラ紀を終わらせたらしい大隕石は太陽系の外から到来した脅威ですが、衝突そのもの以上にそれがもたらしたホコリの類が太陽光を遮ったことが大きな影響を与えたという研究報告もあります。太陽は、天文学的な知識とは別に、相対化を超越する存在として、実感されているのではないのでしょうか。

「神様」に戻りましょう。人類が到達した「神」をめぐる思考は、言語（論理）をもつ存在となった私たちが、総力を挙げて論じてきている幾つかの根源的なテーマの一つとして共有されていると思います。それをここで扱うことはできませんが、私たちの言語は、私たち自身を超える「絶対的な」他者を想定することを可能にし、それによってまた、私たちのあり方を問い直す地平を開拓してきました。神学、倫理学、形而上学が扱ってきた多くの問題は、いまだに展開する力を失っていませんし、深化していると私は考えています。

それにしても、現代化されているそのような問題の地平において、文字通りの「太陽は神様か」という表現は、どのように位置づけられるのでしょうか。最初のところで述べた、「太陽は神様か」という述語づけへの問い（これは、「神様がある〈存在する〉」とは別の問いです）に、私は答えなければなりません。この当惑する「お題」に取り組んで、想像をふくらませたのは、御来光を拝む習俗に刻まれている、原始スープ以来の太陽とのつながりです。それは、ある時代から、あるいはある地域で始まったというような習俗ではなく、何か私たちの存在の底の底から、それぞれの時代や地域に応じた仕方で顕現する振る舞いのかたちであるように思われます。そして、私には、驚くことが幾つかありました。

一つは、御来光の例から、現代人が太陽を、メタファー抜きで、直感的に拝んでいると考える余地があると思うに至ったことです。それは、自分の存在の根源としてでなければ、説明できないように思われます。それ以上でもそれ以下でもなく、その点にとどまるだけなら、このもつとも素朴な次元の「物体」に対する礼拝は、許されてもよいように思われます。もう一つは、明る

なくなっていくことがもたらす「見える」「見分ける」ということの成立と「光」の関係を意識化した、遙かな私たちの祖先の跳躍です。届かないものへの憧憬と畏怖を意識化していくことが、人類の自己認識の始めにあると述べましたが、その前に、そんな跳躍があつたはずです。二つとも、実のところは、いまさら驚くようなことではないのですが、それでも、あらためて、やはり、驚きます。そういうことを思つて、一瞬、深いところから嬉しさに似た感動を引き出すのは、私たちが彼らの子孫だからでしょうか。

それにしても、さらに驚くのは、今では小学生に笑われるかもしれませんが、光がエネルギーであることです。中学生の頃から、そんな風に習ってきたのに、やはり、深く驚きます。「太陽」は恐ろしいほど新しい相貌で、私たちに迫っているのかもしれない。

(注1) 「聖典」として伝えられたテキストを理解するための方法論を考察した古代の教父たちは、「権威」という制約の下で合理性を追求するという厳しい課題に徹底して取り組まざるを得なかった、言語学や解釈学の先達でもありました。例えばアウグスティヌス『キリスト教の教え *De doctrina christiana*』 Augustinus *De doctrina christiana*。

(注2) 『詩篇』は、紀元前5〜6世紀に成立したと考えられている古代ヘブライ語による歌唱集とも言うべきもので、いわゆる『旧約聖書』に含まれますが、上記のラテン語の文言は、『七十人訳』と呼ばれているギリシャ語訳からのラテン訳です。